イギリスに暮らす

画廊に所属し、年に3回展示会を開催している青柳久子さん。子供のポートレートを描き続けています。ポートレートを始められたのはイギリスに来てからだそう。絵との出会いやポートレートの魅力についてお伺いしました。

ポートレート画家
青柳 久子さん

「肖像画を始めたのはCDラジカセがきっかけ」

青柳さんのお気に入り

「子どもが育つ魔法の言葉」

「子育てのバイブルのような感じでたまに読んでいます。アメリカの本で日本語の翻訳も出ています。映画は古い映画が好きで、オードリー・ヘップバーンの『ローマの休日』や『サブリナ』などを見ています」

●ポートレイトを描き始めたのは、イギリスに来てからですか?

はい、そうです。きっかけは、実はCDラジカセなんです。日本から持ってきたCDラジカセを変圧器なしで使用し壊してしまいまして。それで近所に住んでいたイギリス人の友人に相談したところ、その方のご主人がサイエンティストで修理してあげるとおっしゃってくれました。普通でしたらなかなか修理できないものですが、ちゃんと直して頂きまして。お金もかかっただろうと思いましたのでお礼をしたいとその友人に伝えました。彼女は「お友だちだからいらないよ」と言ってくれたのですが、やはりお礼がしたくて、その家の3人のお子さんのポートレイトを描いて差し上げました。すると、とても喜んで頂いて、さらに地元のある画廊に絵を持っていくことを勧められたんです。彼女のアドバイスに従ってその画廊に絵を持っていったところ、マネージャーさんが絵を気に入ってくれまして、地元の新聞の折り込み広告に入れて私の絵を紹介したいとおしゃって頂いたんですよ。そしてギャラリーにも所属することになりました。ポートレイトを描き始めて4年になります。

●画廊の方にも作品が展示されているのでしょうか?

私はお子さんの肖像画を描いていますので、ご依頼されたお母さんの多くは自分のお子さんの存在を表立って知らせたくはないと思われています。この理由から実際に画廊には私の作品は展示していません。その絵を人に販売するということももちろんしていません。ご依頼されたご家族のためにお子さんの肖像画を描き、お金を頂いているという形を採っております。絵の依頼はギャラリーを通じて、もしくは私が個人的に存じ上げている方、例えばお友だちですとか、学校で知り合ったお母さま方から直接頂いております。

●絵はいつごろからお描きになられましたか?

幼稚園に入る前ごろから、父親に教え込まれたという感じです。父が絵を描くことが好きで、幼稚園に入る前に公園などに遊びに行かず、家で絵を描いている父の側にいて父の絵をまねしていました。それで気がついたら、直線や円をきれいに描けるようになっていましたね。小学校の頃は、自分では応募してはいなかったんですが、当時の美術の先生がコンペティションに私の絵を応募して下さり、賞を頂いたことがたびたびありました。ただ自分の知らないところで色々なことが行われていましたし、小さい頃に家に閉じこもりがちだったためか運動神経もあまり発達しなかったですし、絵のことでいじめられた経験もありましたので、私自身は絵を描くことがあまり好きではなかったんですよ。美術の授業以外では絵を習うこともしませんでしたし、仕事も絵とは関係のない分野を選択しました。16歳の時に絵を描くことを止めて、日本で仕事をしている間も全く絵を描くことはしませんでしたね。筆を握らなかったのは、だいたい17年ほどでしょうか。子供の頃の記憶から、絵を描くことを毛嫌いしていたかもしれません。

「絵を差し上げたときに喜んでもらえるのが励みです」

●しかし、再び筆を握り絵を描き始めたわけですが、そのきっかけを教えて下さい。

結婚をして娘が生まれまして、その娘が3歳になった時に、その姿を写真ではなくて絵に残してあげたいなと思ったんです。これが初めて自分の意志で絵を描こうと思った時ですね。学校の授業でしか油絵を習いませんでしたが、これを契機に油絵を学びまして、娘の肖像画を描きました。それから日本で2年ほどイラストレーターとして仕事をし、主人がイギリスに赴任することになり渡英しました。こちらに来てからもイラストレーターの仕事は続けましたが、締め切りに間に合わせなければいけないというストレスと、イラスト自体が残されるものではなくて消費されていくものではなのか、という疑問が私の中に湧いてきまして、これは違うかなと思うようになりました。そんな時に子供のポートレイトを描く機会に出会ったわけです。お子さんのポートレイトを描いて差し上げると、ご家族はとても喜んでくれて大切に絵を保管してくれます。特にロンドンは国際都市ですので、原画を持ってヨーロッパの都市に行かれているご家族がたくさんいらっしゃいまして、様々な地に私の絵が残っていることはとてもうれしく思います。また、ポートレイトをご依頼する皆さんは絵が出来上がるまで「いつでもいいですよ」とわりと待ってくれます。この締め切りがない方が、私の性格にあっているかな、と(笑)。

●絵を描くことに対して現在、心境の変化のようなものを感じられますか?

以前までは、真いものに蓋をする、ではありませんが、絵を描くことを避けていましたが、避けていても何も始まらないということに気づきました。絵を描いて差し上げると皆さん喜べて頂けるので、それが描いていこうという励みになっています。あと愛情を込めて描いていますので、絵を納品する時に惜しい気がするんですよね(笑)。この子をどうやったらかわいらしく描けるかな、と思って最初から作業をしていますから、自然と気持ちが入ってしまうのでしょうね。手渡す時は、我が子を手放すような気持ちになってしまいます。

●ポートレイトはどのように描いているのでしょうか?

やはりお子さんに長い時間ポーズをとってもらうことには無理がありますから、何枚かお写真をお借りするか、私が写真を撮りそれをもとにして描いています。ただそのまま写真からお子さんを描くのではなく、実は自分で少しアレンジを加えているんですよ。例えば、服やポーズ、表情などですね。それから依頼されたお母さまのご要望で髪や肌の色を修正したりもしています。ただし本当に若干のアレンジです。あまりにも本人とかけ離れていたら、ポートレイトではなくなってしまいますからね。私の描いているポートレイトは、写真そのままを絵にしたというものは1枚もありません。この子はこう描きたいという構想がありまして、写真を頂き、お母さまのご希望に沿って本人とかけ離れていない程度のちょっとした修正を加えて完成させます。また構想の段階で依頼された方とお話をして、絵に入れる題材も決めます。例えばお子さんが好きなことや習っていること、バレエやフラメンコなどですね。これらを題材として入れています。

●イギリスへは5年前に来られたとお伺いしましたが、最初の印象はどうでしたか?

イギリスに来たことがとてもうれしかったのですが、不便な思いもしました(笑)。それがだいぶストレスになりましたが、今は慣れましたね。ただ子供を持つ親としては、直接日本のように耳鼻科や眼科にいけない医療システムは、未だに不便を感じます。絵に関しては、日本のようにうるさくないというか、さまざまな技法を駆使して絵を完成させるということがないように思えます。それからポートレイトをやっているアーティストも少ないかな、と。私の知っている範囲のアーティストのほとんどが風景画ですね。日本の場合ですと、風景というのが基本で人物が描けて当然という雰囲気がありますけれど、こちらでは人物を描いている人は少ないようです。ただ自由に描ける雰囲気はこちらにはあると思います。

●最後にポートレイトの魅力をお聞かせください。

ずっと残せるものですし、大きさにもよりますが、コピーをしてご親戚の方々に送ることもできますので、よい記念になると思います。特に国際結婚などでこの国に永住されてみたに日本に帰国できない方々には、日本のご家族への素敵なプレゼントになるのではないのでしょうか。私はいつか日本に本帰国するので、このような方々を優先して差し上げたいと思っています。現在実は作業的に現地の方の依頼で立て込んでいてお待ち頂いている状況ですが、写真と違い、ご依頼されたお母さまのご要望に沿ってアレンジできますので、ご興味のある方はご連絡ください。ポートレイトに適したお子さんの年齢は3歳から10代前半までです。

青柳さんの描いた子供たちのポートレイト。
青いシャツの3人の男の子の作品は、ポートレイトを始めるきっかけになったもの

目を輝かせて、ポートレイトの説明してくださる姿が印象的でした。

青柳 久子(あおやぎ・ひさこ)さん

東京都出身。幼少の頃より絵の描き方を父親より習う。10年電話の交換手として勤務、その勤務の傍ら、水泳指導員、着物着付師の資格を習得。その後、イラストレーターに転身。2000年にご主人のイギリス赴任を機に渡英。その1年後にギャラリーに所属する。

●ポートレイトのお問い合わせ
portraitist.jp